

2014年度受託研究概要報告

療養型病院における病室のデザインと暮らしに関する研究

研究メンバー

久富敏明 基礎教育センター准教授  
小菅瑠香 デザイン学部環境・建築デザイン学科助手

委託者

医療法人 日新会

研究概要

長期入院の高齢患者を多く抱える大阪市の北堀江病院（受託先）では、病院建物の老朽化により、近々の新築移転を考えている。

北堀江病院に関わらず、超高齢社会において全国的に入院患者の高齢化が目立ってきた現在、従来の大部屋病棟での大規模処遇では、認知症患者の不穏行動や、看護業務におけるより一層の見守りの必要、ポータブルトイレやオムツといった病室内排泄など、多くの問題を解決できないことが、医療・看護・環境学の諸々の調査で明らかになっている。

本研究では、新しい病院における設計の方向性を探るべく、特に病室・病棟に焦点をあてて、長期入院の高齢患者を抱える地域病院4事例で病棟や病室にて医療者に現地ヒアリング調査を実施し、環境デザインの視点から療養空間の設計について整理を行った。



近藤内科病院の病室視察

研究成果

日本医療福祉建築協会のデータベースなどを元に受託先と検討した結果、豊中の「坂本病院」、徳島の「近藤内科病院」、神戸の「宮地病院」および「本山リハビリテーション病院」の視察およびヒアリング調査を行った。

視察項目については主に「病棟・病室のデザインと暮らし」が分かる箇所とし、ヒアリング項目については今後の受託先の移転新築業務も念頭において、主に「建築構成、使われ方、工夫、長所と短所」「建設プロジェクトの体制と進め方」「改修の有無、改修に至った経緯」の3点に重点をおいた。

患者が高齢化した病棟では、認知症や体力の低下した患者のために見守りや介護の手が足りず、また看取りが多いためにスタッフのモチベーションが下がっていくというのは、どの病院でも共通した課題であった。

このため、病棟での患者の暮らしには、家族の介入が望ましいとされた。設計面でいえば、家族の居場所を病室に作ることや、患者のみならず家族とスタッフが交流できる場面がデザインされていることが重視され、家族が訪れやすいためにアートなどを積極的に取り入れて病院らしさを払拭しようと試みる病院もあった。

病棟の生活には「スタッフ」「患者」「家族」の三者が登場し、一般に病院設計の際には「患者の療養」と「看護業務のしやすさ」の相対する2軸で病棟の方向性が図られるが、患者が末期になって意思の疎通が図りにくくなるほど、環境のデザインはスタッフ寄りにシフトし、患者の療養環境への配慮が二番手にされる傾向が明らかになった。

